日医報告

平成21年度医療政策シンポジウム

国のありかたを考える

―平時の国家安全保障としての医療―

常任理事　直　江　寿一郎

2月5日（金）午後1時から日医会館講堂で開催されたシンポジウムには、一般参加者を含め270余名が出席した。

唐澤会長は挨拶で、経済社会の行方が不透明な今、国家の骨格として社会保障を認識することの重要性を指摘された。

中川常任理事の司会により、宇沢弘文東京大学名誉教授、武見敬三前参議院議員、佐藤　優元外交官の講演がなされた。

◇

宇沢東大名誉教授は、1945年に入学した第一高等学校の校長であった安部能成が「リベラルアーツのカレッジである」と毅然と占領軍に立ち向かった姿勢に感銘を受け、自身も、経済学的には一般的理論ではない、社会的共通資本としての医療について信念を貫いて主張してきたとして、教育とともに医療は社会的共通資本の重要な構成要素。社会を構成するすべての人が、経済的、社会的条件にかかわらず、その時に社会が提供できる最高の医療を受けることができ、医師が本命を全うできるような制度的、社会的、経済的環境が整っていることであるとして、サッチャー政権下で英国の医療費が、ベトナム戦争でベトコン一人を殺すのに一番安上がりで効率的な方法を研究したキルレイショーの考え方をもとに抑制されたことなどに触れ、一度壊すと建て直しは困難と述べられた。

武見教授は、1980年代の冷戦終了後、国境を越えて問題化してきたのは気候変動、感染症、パンデミック、エネルギー危機など人間の安全保障の問題であり、その中枢は人間の健康と明言。顕在化してきたグローバルヘルスの課題に積極的に発言することが、日本にとって、アジアをはじめとする世界各国に力を示していく手段である。今後の課題として、官民協力、官官協力、専門家の養成などを挙げられた。自らも参画したG8洞爺湖サミットがその契機となっていると紹介し、新政権の医療政策に対して「いまだ見えてこない」と批判された。

ロシア外交が専門の佐藤氏は、日医が前科のある者を呼んだ初めてのケースではないかと会場を沸かせ、現在、日本には、検察に代表される警察国家（官僚）とエリート集団による明治時代からの日本的な忠誠心からなる国家の二つが存在する。

リーマンショック以来、各国は自国の利益を主張する傾向が強くなっている。その中で、牽引力になるのは中間的な集団である。日医は、職能集団、専門家集団として、国民のための医療を提供するよう主張し、医師のための施策を打ち出すこと、この2つの連立方程式を解くことができれば、どこの政権でも影響力を発揮できると述べられた。

◇

パネルディスカッションでは、司会の中川常任理事が、二人が「世界がグローバル化」「自国の利益を求める」と異なった視点であったことを指摘。武見教授は、グローバル化にあって、これからは国民の考えが大きく政治を動かす。専門集団である日医は積極的に行動すべきと明言。佐藤氏が、武見太郎元日医会長の行動をたたえたことから、子息である武見教授が、一斉休診、保険医総辞退の重大な決断を示した時の思いを述べられた。

佐藤氏は、また、先が読めない政権与党の政策は、鳩山首相が“直前の状態をみて決定するのが最上の決定であるという理論の専門家であったからである”と明かし、会場をほころばせた。

次　第

司会：中川　俊男
（日本医師会常任理事）

開　　会　13：00
主催挨拶　唐澤　祥人（日本医師会長）
テ ー マ　国のありかたを考える
―平時の国家安全保障としての医療―
特別講演
「社会的共通資本としての医療」
宇沢　弘文
（日本学士院会員、東京大学名誉教授）
座長：竹嶋　康弘（日本医師会副会長）
講　　演
Ⅰ「人間の安全保障と健康～我が国のグローバルヘルスへの貢献」
武見　敬三
（東海大学教授、日本国際交流センター・シニア・フェロー、長崎大学客員教授）
Ⅱ「日本国家のあり方と医療」
佐藤　　優（元外交官、文筆家）

パネルディスカッション
「世界の中の日本と社会保障のあり方」
司会：中川　俊男
（日本医師会常任理事）
パネリスト：佐藤　　優、武見　敬三
閉　　会　17：00